

<前回>弁証法神学

- ・現代神学は弁証法神学から開始された。
- ・19世紀の近代社会に埋没したキリスト教とその神学（自由主義神学）に対する徹底的な批判とそれによるキリスト教の本来の在り方の取り戻し。神学は固有の方法と基礎の上に形成されねばならない。神と人間との絶対的質的差異、神の下における人間の危機
- ・フォイエルバッハの積極的評価：19世紀の近代社会に埋没したキリスト教とその神学（自由主義神学）に対する徹底的な批判とキリスト教の本来の在り方の取り戻し
- ・宗教と啓示の区別 → フォイエルバッハの批判は啓示には及ばない
- ・宗教：神・救済へ向かおうとする人間的努力＝自己救済の試み、不信仰としての宗教
 - ↓
 - バルト神学の強さと弱さ、あるいは功罪
- ・近代的世界観と聖書的世界観との対立、近代人は聖書的な宗教を信じうるか？
 - ↓
 - 聖書の非神話論化(Entmythologisierung)と実存論解釈
 - 聖書の信仰表現において、神話論的世界観（形式）を切り離して、実存的決断の事柄（内容）を顕わにする。

8. ポスト近代とキリスト教思想

1. 現代神学におけるポストモダンのフェイズ：

1970年代以降、神学世界の巨人以後。

↓

2. 混沌の中の諸動向

- ・解放の神学の系譜（ラテン・アメリカ、黒人、女性、アジア）→文脈化神学
- ・政治と革命の神学（フランクフルト学派）：ティリッヒ、モルトマン
- ・科学論の神学：パネンベルク、トランス、ポーキングホーン、マクグラス
- ・プロセス神学：ハーツホーン、カブ、グリフィン
- ・解釈学的神学（ポスト・ブルトマン）：ケーゼマン、フックス、エーベリンク
- ・ネオ・リベラルあるいはイエール学派：リンドベック、ハワーワス
- ・エコロジーの神学あるいはエコ・フェミニズム
- ・エキュメニズムと宗教の神学：ヒック、ニッター、ピエリス
 - などなど、インド、中国、フランス、イタリア

1 ティリッヒと解放の神学

1. ティリッヒ(1886-1965)

神学と哲学の境界（神学者・哲学者）、宗教社会主義、文化の神学、宗教史の神学
ドイツからアメリカへ → 現代キリスト教思想は理論と実践の両面で変革を必要としている。

2. ティリッヒのフォイエルバッハ論

- ・ヘーゲル（本質主義）批判の文脈：実存主義、マルクス、キルケゴール

- ・近代の宗教批判の先駆者、宗教的象徴あるいは神話の消極的理論の代表者
 - ・フョイエルバッハへの肯定と否定
3. 宗教的象徴の理論：狭義の宗教を構成するもの
 - ・象徴の概念規定：多義性（非本来性）、指示、開示、参与（力・作用）、承認
 - ・宗教的象徴：無制約的なものを指示し、経験へと開示する。意味根拠の形態化・具体化する。
 4. 狭義の宗教の構造：啓示相関（出来事と受容との相関）
 - ・広義の宗教（意味世界の根拠付け）の具体的な現実化
究極的関心（ultimate concern）と自己同一性
 - ・宗教的象徴の真理：経験への適切性と自己否定性（十字架）
 - ・問題：象徴の指示対象とは何か → 宗教的実在論、宗教的真理論
 5. 宗教と社会

「意味世界の根拠付け」の二面性：正当化と転換（イデオロギーとユートピア）
社会主義とキリスト教とは一致しうるか？

社会正義と愛における基本的な一致：社会主義は必ずしも無神論ではなく、キリスト教の救いは単なる個人の内面の事柄ではない。
 6. 解放の神学 → 黒人解放の神学、女性解放の神学、アジア神学
現代カトリック神学の一つの潮流。人間解放と救済。
宗教的救済は、抑圧された人々の解放（政治的・経済的）と不可分である。抑圧の状況を意識化し言語化するための共同体の設立（基礎的共同体）

2 モルトマン、パネンベルク

先行世代の神学者の徹底的な批判と継承、1960年代以降の新しい問題状況の中で。

言葉・教会への集中→個人主義、諸思想との断絶

歴史の地平（約束・希望・実践）の回復、批判プラス形成

(1) モルトマン

1. 神学の実践的な射程としての社会変革
2. 前期：黙示的終末論の再評価、希望の地平におけるキリスト教
現在の終末論によるキリスト教信仰の矮小化
3. 後期：フェミニズムとエコロジーの問題連関における神学の再構築
4. 社会的三位一体、関係性としての神の像
バルトから、バルトを超えて

(2) パネンベルク

5. 神の言葉の神学、実存主義的神学への批判 → 歴史の神学
黙示的終末論の再評価、自由主義神学の真理契機
6. 哲学や科学思想との対話する神学：人間存在と意味の問いから宗教へ
科学論・人間学→神学体系構築
7. 有意味性と全体性、有意味な経験の可能条件
カントの無制約者の命題：「制約的なものが与えられているとき、制約的なものの全体が、それゆえ端的に無制約的なもののも与えられている」

8. 意味の問いとしての宗教的問い、現代の精神状況：意味空虚・意味喪失
9. 意味連関（部分と全体、有限）における日常的意味の成立と、日常的意味地平自体の根拠としての全体性（無限）、超越あるいは全体：水平と垂直
10. 有限な意味連関への志向性としての日常性、無限の意味根拠への志向性としての宗教無限の意味の地平は宗教においてのみ顕わに問われる。意味の問いは顕わに問われるとは限らない。

有意味性（全体）の度合い：日常性、科学、形而上学、宗教

↓

終末論

3 プロセス神学

1. ホワイトヘッドの形而上学（プロセス哲学）
2. 近代以降の状況下での形而上学の復権
 - 近代：伝統的な形而上学の解体、実体形而上学の否定、カントの批判哲学
実証主義
 - ↓
 - 宗教は、自然科学・世界観よりも道德に接近。神学の倫理化。
cf. ブルトマンの非神話論化
3. 「宗教と科学」の関係の問い直しには、形而上学的な基盤が必要になる。
 - 実在と相互作用、プロセスから実体性の構築へ
 - 現実的存在（actual entity）の両極構造
4. 理念（平和、自由、創造性）の実現の意義と、「神」の役割
 - 万有在神論（Pan-en-theism）、仏教とキリスト教の間（?）
5. プロセス哲学を神学に導入する試みとしてのプロセス神学
 - ハーツホーン／カブ／グリフィン
 - 自然主義的な有神論、「無からの創造」の否定、
プロセス内部でプロセスを導く神

4 神学と科学—トランス、ポーキングホーン、マクグラス—

1. 近代の批判主義を超えて、実在論の復権 → 批判的実在論
 - 対話・協力あるいは再統合
2. ニュートン力学から現代科学への転換
 - 粒子と絶対空間・絶対時間 → アインシュタインの相対論、そして量子力学
 - 近代的な「主観—客観」図式への徹底的な批判
 - 現象学、ハイデッガー、解釈学
 - 観測理論
3. トランス：批判的実在論としてのバルト解釈
 - 科学的認識方法は、観察者が実在に押しつけるものではなく、実在が観察者に課するものである。
 - 近代の文献学や歴史学に合わせて聖書を読むのではなく、啓示の事実性において聖書を読む。その読解の際の合理性を明確化するものとしての自然神学。

4. ポーキングホーン：実在の予測不可能性と非決定論

実在との関わりで得られる知見によって実在理解を訂正しながら、実在のより十分な理解へと接近する（下から上へ）。この方法論的態度において、自然科学と神学は一致する。

5 イエール学派とポストモダン神学

ポストモダン神学：

大きな物語（啓蒙的な普遍主義）の断念し、信仰共同体の物語（小さな物語）のより深い理解を目指す。

自己完結的な言語体系としての教理。普遍的な真理ではなく、自分たちの真理。

啓蒙主義的な普遍性への決別。

自由主義から共同体主義へ。

<参考文献>

0. ティリッヒ 『ティリッヒ著作集』白水社、『組織神学』（全三巻）新教出版社。
1. 芦名定道 『ティリッヒと弁証神学の挑戦』創文社。
2. 『ティリッヒ研究』（現代キリスト教思想研究会）創刊号～第11号
<http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/christ/tillich/tillichstudies.html>
3. グティエレス 『解放の神学』岩波書店、コーン 『抑圧された者の神』新教出版社、リ
ューサー 『性差別と神の語りかけ』新教出版社、キリスト教アジア資料センター編、李
仁夏・木田献一監修 『民衆の神学』教文館。
4. 熊澤義宣・野呂芳男編 『総説 現代神学』日本基督教団出版局。
5. モルトマン 『希望の神学』『十字架につけられた神』『三位一体と神の国』『創造に
おける神』『神の到来』『神学的思考の諸経験』『科学と知恵』新教出版社。
6. パネンベルク 『歴史としての神学』聖学院大学出版会、『組織神学の根本問題』『組
織神学入門』日本基督教団出版局、『神の思想と人間に自由』『形而上学と神の思想』
法政大学出版会、『人間学』教文館。
7. 近藤勝彦 『歴史の神学の行方 ティリッヒ、バルト、パネンベルク、ファン・リューラー』教文館。
8. 森田雄三郎 『現代神学はどこへ行くか』教文館。
9. 『ホワイトヘッド著作集』松籟社。
10. カブ、グリフィン 『プロセス神学の展望』新教出版社。
11. 山本誠作 『ホワイトヘッドの宗教哲学』行路社。
12. 田中裕 『ホワイトヘッド 有機体の哲学』講談社。
13. マクグラス 『科学と宗教』教文館。
14. リンドベック 『教理の本質』ヨルダン社。
15. 宮平望 『現代アメリカ神学思想 平和・人権・環境の理念』新教出版社。
16. 栗林輝夫 『荊冠の神学』『現代神学の最前線』新教出版社。
17. 芦名定道 「近代/ポスト近代とキリスト教——グローバル化と多元化」
『キリスト教と近代化の諸相』（「近代/ポスト近代とキリスト教」研究会、研究報
告論集・創刊号）2008年3月、pp.3-18。

<http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/christ/modernity/journals/aspects/07ashina.pdf>